

133. 平安京における葬地の地形構造と都市的機能に関する研究

A Study on the Topographic Structure and Urban Function of the Cemeteries in HEIANKYO

星野裕司*・齋藤 潮**
Yuji Hoshino and Ushio Saitoh

This paper aims at to analyze the topographic structure of the cemeteries in HEIANKYO, to examine the relation of those urban functions and the structure in consideration for the arrangement of several institutions in those cemeteries. The findings are as follows.

- (1) The cemeteries are divided into 4 types in view of those topographic objects and forms. These are OKAARI or OKANASHI as regards objects, CONCAVE or CONVEX as regards forms.
- (2) The cemeteries include 3 kinds of institutions, each figure out the topographic structure according to those functions and human activities.

keywords: Cemetery, HEIANKYO, Figure out topography

墓地、平安京、地形の解説

1. はじめに

社会生活という観点からみると、葬儀や墓地にはポジティブな側面が浮かび上がってくる。葬儀は、人の死を個人的な出来事にとどめず社会的に共有する儀式であり、個人を社会に繋ぐ機能を果たしている。また墓地は、墓参りや法事を通じて、その場所と人々の日常の生活空間との関係や、血縁・地縁の人々の歴史を形象化していると言ってよい。

我が国のとくに漁村のような伝統的な集落においては、墓地はしばしば集落を見下ろす陽光燦々たる高台に立地し、その土地に生活する人々の日常と絶縁された関係にないことが多い。しかし、現代の都市においては、迷惑施設として墓地はしばしば扱われる。霊園は著しく離れた郊外に立地し、生活空間との関係はむしろ絶縁される傾向にある。

個人と社会を結び、伝統的な集落に一定のオリエンテーションを与えてもいた墓地という空間装置は、都市のようなより大きな空間においてどのような様態をもっておさまるべきものなのか。これまで等閑視されることが多かったこの問題にアプローチするために、本研究は平安京のシステムに着目することとした。

日本都市史において、永続的なものとして成立した都市は平安京が最初である。政治的な計画都市として出発した平安京は、徐々に住民に住みこなされた生きられる都市として成熟していく¹⁾。当時の律令体制にとって、死やそれに付随することがらは穢として極度に排除されていた²⁾が、平安時代中期以降には、浄土教などによって死や穢を積極的に見直す思想が生まれた³⁾。これらの社会思想の変化と計画都市から生活都市への都市構造の変化は、強い相関があると考えられる。

関連研究としては、現代都市における火葬場の整備論⁴⁾や異界的要素に着目した江戸の空間構造の分析⁵⁾、平安京郊外の研究⁶⁾などがあるが、墓地空間と都市空間との接続のありかたについて、地形、施設配置や人々のアクティビティの観点から検討したものは見受けられない。

以上の観点から、平安京の葬地について、①葬地が立地した空間が平安京に対してどのように位置づけられるのか、②葬地の地形構造はどのような特徴を有していたのか、③葬地に立地する諸施設の配置と機能との関係を通して、葬地の地形をどのように当時の人々が解釈していたのか、これら3点を明らかとすることを本研究の目的とする。

2. 研究の方法

本研究では、『京都の歴史1 平安の新京⁷⁾』『史料京都の歴史⁸⁾』『京都市の地名⁹⁾』を基本資料とした。庶民の葬地に関しては『古墳時代以降の埋葬地と葬地¹⁰⁾』『平安京・中世京都の葬地と墓制¹¹⁾』を参照して6地域を、同様に皇族の陵墓は『山稜¹²⁾』、貴族の陵墓は『文献にあらわれた墓地—平安時代の京都を中心として—¹³⁾』を参照し、貴顕の陵墓に関して11地域の葬地をリストアップした¹⁴⁾。

また、葬地に立地する諸施設を文献⁸⁾を中心に抽出し、立地場所を国土地理院発行の1/25,000地形図上で確認した。さらに葬地の規模や勾配、諸施設の位置関係などについて、地形図上では読みとりづらい微妙な地形変化などを確認することに留意し、詳細な現地調査を行った。以上の作業によって得られたデータについて、平安京に対する葬地の位置づけを行い、葬地の構造を地形に着目して分類し、諸施設の機能や配置関係の整理を行い、葬地の位置づけや地形構造に基

*正会員 熊本大学工学部環境システム工学科 (U. of Kumamoto)

**正会員 東京工業大学大学院社会理工学研究科 (Tokyo Institute of Technology)

づいた解釈を行った。

表-1 時代背景と葬地に関する事項

西暦	事項	史料
645	大化改新	
646	大火の薄葬令	日本書紀
694	藤原京遷都	
701	喪葬令皇都条	令義解
710	平城京遷都	
784	長岡京遷都	
792	長岡京で贅沢な葬儀の禁止	類聚三代格
792	深草山西面での埋葬禁止	類聚国史
793	京下の山々で葬埋・樹木伐採の禁止	類聚国史
794	平安京遷都	
797	愛宕・葛野郡で家の側の埋葬を禁止	日本後紀
813	京幾で路傍の餓死者を放置することを禁止	類聚三代格
842	左右京職が島田・鴨河原等の屍體を焼かせる	続日本後紀
866	下賀茂社に近いため、神楽岡辺の埋葬を禁止	日本三代実録
871	百姓の葬送・放牧の地を葛野・紀伊郡の河原に定める	日本三代実録
908	左右京職に路傍の骨を埋葬させる	扶桑略記
1086	白河上皇による院政の開始	

3. 平安京に対する葬地の位置づけ

平安京の葬地に関係する事項を、庶民の葬地を中心として表-1に整理する。大化改新によって天皇中心による祭政一致を目指した施政者たちは、大火の薄葬令（殯宮儀礼・大規模陵墓造営の禁止）¹⁴⁾、喪葬令皇都条（宮都・大路の内部及び近辺への埋葬の禁止）¹⁵⁾を公布し、葬地や葬送を穢として都市や生活の場から排除した。また同時に、多くの条例によって貴顕の陵墓が造営される山々においても埋葬が禁止された¹⁶⁾。以上より、葬地は都市と山の中間的な場所に立地することになるが、その現象は、村落空間の分析成果を適用することによって次のように解釈される。

福田アジオの村落領域論¹⁷⁾では、ムラは「ムラーノラーヤマ」という三重の同心円によって領域が構成され、中間的な領域である「ノラ」は耕地として把握されている。一方、伊東久之はノラの語義変遷に着目して、福田の「ノラ」が中世には無主の地であったものが近世において耕地化された歴史的な概念であることを示した¹⁸⁾。平安京において葬地が立地した中間的な領域とは、伊東久之が村落において指摘した無主の地であったと考えられる。

そこで、以上の村落における知見を平安京に適用すると、平安京の都市領域は「サトーノヤマ」の三重の構成として把握される。村落の「ムラ」に対して、平安京を示す概念を「サト」としたのは、当時、京内の仮の内裏を里内裏と呼んでいたことによる。

日常生活が営まれる「サト＝生活空間＝居住域」、貴顕の陵墓が造営される「ヤマ＝聖的空間＝非居住域」の2つの領域に対して、葬送が行われる「ノ」

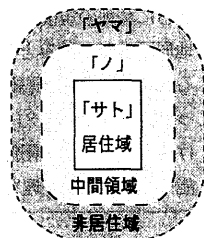


図-1 平安京の都市領域

は、「中間的領域」として成立したと考えられる。

『岩波古語辞典¹⁹⁾』によれば、「里：人の住めない山や野に対して、人家の集落をなしている場所」「山：野や里に対して人の住まない所」とある。「ノ」は居住域でも非居住域でもないと同時に、「サト」「ヤマ」の概念を支える下位概念を形成している。これは「ノ」という領域が、「サト」「ヤマ」を支える逆説的な重要性を示していたと考えることができる。以上を図-1に示す。

4. 葬地の地形構造

冒頭で述べた庶民の葬地として6地域、貴顕の墓所としての11地域について、重複するものを整理すると、平安京の葬地は「化野・嵯峨野」「双ヶ岡・宇多野」「船岡・蓮台野」「神楽岡・白川」「鳥辺野」「深草野」「醍醐」「小野」「木幡」「岩倉」「後山階」の11地域となり、うち6地域は京都盆地内である。それらを図-2に示す。

柳田国男によると²⁰⁾、野本来の語義は山麓の緩傾斜地ということであり、一般的に野は傾斜地でも平野でもない緩やかな起伏を有していた。上記11地域は、約2~3km四方に広がる約3.5~6.5%の勾配を有した地形的に曖昧な空間である。特に勾配に関しては、0~4%まではほとんど平坦に見え、7%までは歩行速度も変わらない²¹⁾という知見から、人間が認識できる最低限の勾配であったと考えられる。

しかし、「～野」という地名が付けられている以上、それらの地形がひとつのまとまりとして認識されていたはずである。そこで、どのようなまとまりを地形構造として認識し

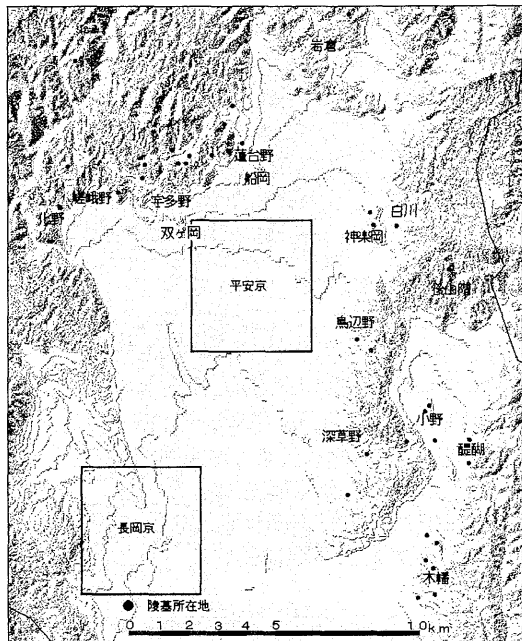


図-2 平安京の葬地

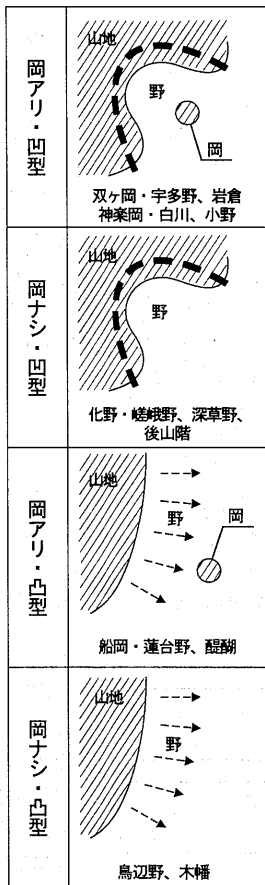


図-3 地形構造のタイプ

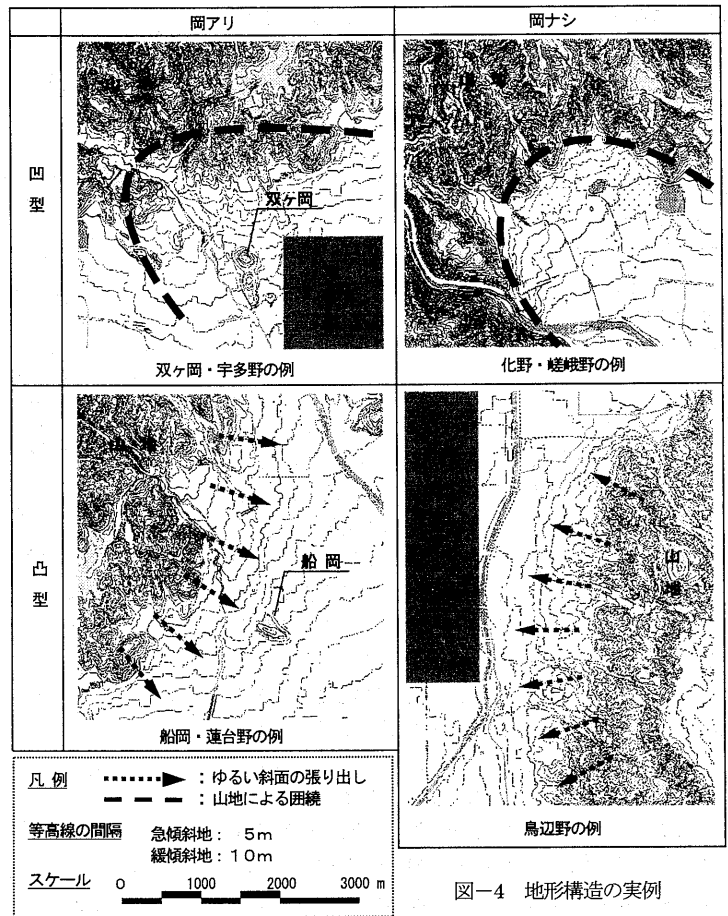


図-4 地形構造の実例

ていたのかという点について、要素及び形状の2点から分析した。

①要素

葬地を構成する主要な地形要素は、岡・野・山であり、野・山は全てに共通する要素である。まず岡を有しない墓地は、「化野・嵯峨野」「深草野」「後山階」「鳥辺野」「木幡」の5地域であり、地名のついた岡を有する葬地は、「双ヶ岡・宇多野」の双ヶ岡、「神楽岡・白川」の神楽岡、「船岡・蓮台野」の船岡、の3地域である。京都盆地外の「岩倉」「小野」「醍醐」の3地域は、野の端部に岡状に隆起した地形を確認することができる。そこで前者5地域を「岡ナシ」、後者6地域を「岡アリ」と分類する。特に京都盆地内の「岡アリ」型葬地に関しては、野の背後にしっかりと山容を持つ山があり、「ノ」のまとまりに対して、その山と岡が連携して寄与していたのではないかと考えられる（例えば、「双ヶ岡・宇多野」における双ヶ岡→宇多野→大内山の関係）。

②形状

葬地の地形形状を、野と山がどのような関係を有していた

のかという点に着目して整理する。背後の山地が野を包み込むように存在している地形は「双ヶ岡・宇多野」「岩倉」「神楽岡・白川」「小野」「化野・嵯峨野」「深草野」「後山階」の7地域であり、これらの地形は隠国の泊瀬などの室地形に近いが、「ノ」地形としてはそれらよりゆったりとした空間を有している。一方、その他の4地域は山裾が舌状に延長してきたような形状を有している。そこで前者を「凹型」、後者を「凸型」として分類する。「凹型」は地形的なまとまりを背後の山の形状に大きく依存していたのに対し、「凸型」は野の形状自体が一つのまとまりを有しているものと考えられる。「凸型」地形は勾配が約5.5~6.5%と大きく、他の地形に比べて多少急な勾配を有している。京都盆地内でこの構造を有するものは「船岡・蓮台野」「鳥辺野」である。それらは徒然草百三十七段に「都の中に多き人、死なざる日はあるべからず。…鳥部野、舟岡、さらぬ野山にも…」とあるように、当時の人々はそれらを代表的な葬地として認識していた。その大きな要因の一つとして「凸型」の地形構造を指摘することができるのではないかと考えられる。

以上二つの視点から、平安京の葬地は4種類に分類され、その概念図を図-3に、実例を図-4に示す。

5. 諸施設の機能

史料の存在状況から京都盆地内の6地域に限って考察する。それらの葬地に立地する諸施設について、文献8)を中心に地域ごとのリストアップを行い、6地域のほとんどに共通する性格を整理すると、それらの諸施設は、別業、浄土教寺院、御霊社の3つに大別できる²⁰⁾。それら諸施設が有していた都市的機能を、歴史学・宗教学等の知見に基づき、以下に整理する。

①別業

葬地が立地した「ノ」は、貴顕の遊猟・行楽の地であり、平安京周辺部においても、『日本紀略』などによれば遷都後すぐに桓武天皇がしばしば紫野に遊猟した記事が見える²¹⁾。しかし、恒常的な別業を営むようになるのは、葉子の変以降であり、永続的な都市としての確立以降である。高橋康夫によれば²²⁾、田園生活から切り離された都市民たちが郊外に別業を営むことで、自然を再発見し、従来の歌枕的・概念的な名所からありのままの自然の名所を成立させた。

一方、葬地と別業という相反する両者が共存していた要因として、「ノ」が有していた「アジール（無縁）性」というものを指摘することができる。網野善彦の知見²⁴⁾を参照すると、「ノ」は葬地であることによって「無縁の場」という性格をより一層明らかになる。そのため「サト」の生活から離れると同時に「ヤマ」では得られない親しみやすい自然が得られる場所として、貴族たちに最良の別業建設の地を提供したのではないかと考えられる。また、宇多野における仁和寺・四円寺による御室の形成や、白川における院政の開始などは、「サト」の生活から離れ、無縁の場としての性格が顕著な「ノ」という空間を共有する事が、貴族達に新たなコミュニティを創出させる要因になったのではないかと考えられる。

②浄土教寺院

平安京の成立は、自然から隔離した生活を余儀なくしただけでなく、古代的・民族的な共同体も解体し、新しい都市的個人と呼べるような都市民を成立させた²⁵⁾。それらを社会的な背景として、市聖空也は活動し、単に遺体の捨て場所であった葬地を宗教的な意味を持つ空間へと変貌させていった。そこで布教された浄土教とは、個人々の煩惱と罪悪の自覚を基礎とする体験的反省的な教えであり、自己を穢として観照するものであった。そのような思想が、平安京の都市民たちに、新しい都市的個人としての自覚（自己発見）を促していった²⁶⁾。空也が西光寺（六波羅密寺）を鳥辺野に創建したように、その思想は穢の場としての「ノ」＝「葬地」を舞台としていた。

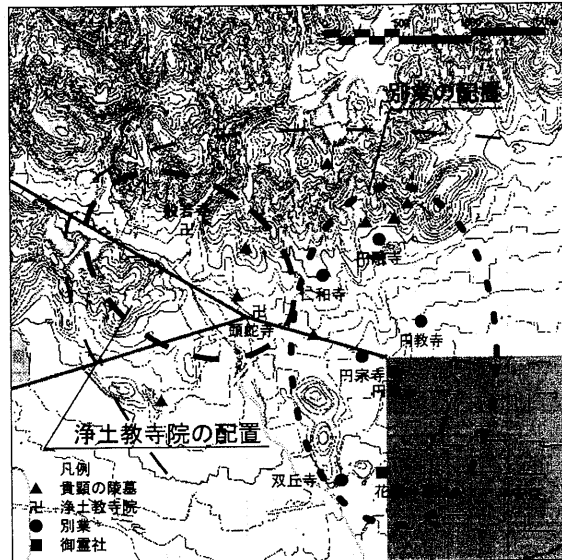


図-5 「凹型」葬地における諸施設の立地（双ヶ岡・宇多野）

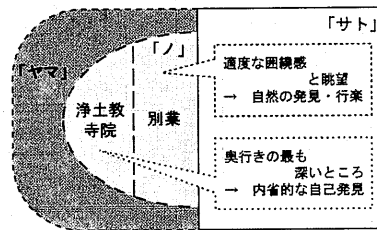


図-6 「凹型」概念図

③御霊社

庶民に発達した御霊信仰とは、疫病等の災厄を特定の個人霊の崇りに寄託し、祭祀（御霊会）を通じて鎮め

ようというものである。そうした信仰が発達する背景には、都市的問題（集住による疫病の増加）が存在した。しかしその機能は疫病の不安を軽減するだけではなく、積極的なものも有していた。井上満郎によれば²⁷⁾、御霊神とは都市神として機能していたものであり、それを祀る祭祀は新たな都市的共同体を創出するイベントとして機能していた。

御霊会は平安京の中心である神泉苑において始まったが、970年から祇園御霊会が始まり、それ以降、平安京周縁部で多くの御霊会が開催されるようになる。祇園御霊会が行われた祇園天神堂は、現在の八坂神社であり、空也が創建した西光寺（六波羅密寺）と同様、鳥辺野に立地し、祇園御霊会の開始も西光寺創建直後である（表-1、図-5参照）。上述した浄土教の自己発見という機能と御霊会の共同体の創出機能が、同じ「ノ」を舞台として強い関連性を有していたのではないかと考えられる。つまり、個人の自覚と共同体創出への欲求は、一対の心的現象として把握できる。なお、ここで述べた祇園御霊会は現在、京都三大祭りの一つとして継承されている祇園祭であり、その共同体創出機能の有効性・持

続性というものを推し量ることができる。

6. 地形構造と機能の関係

「ノ」における諸施設の配置関係を検討することにより、前2章で把握した地形構造と諸施設の機能との関係を考察する。

まず全体的に述べると、別業と浄土教寺院の両者は明確にゾーニングされて配置されている。また、その配置の仕方は、地形形状に大きく依存している。そこで、凹型/凸型により別業及び浄土教寺院がどのように配置されているかという観点から、以下に詳細な検討を行う。

①凹型

「凹型」の地形構造の例として、「双ヶ岡・宇多野」を図-5に示す。「双ヶ岡・宇多野」における別業は、双丘寺、仁和寺・円融寺・円教寺・円宗寺・円乗寺（御室）であり、浄土教寺院は般若寺と頭陀寺である。また、御霊社は花園今宮社である。

「双ヶ岡・宇多野」の事例においては、双ヶ岡-仁和寺-一大内山の軸線を境に、平安京に対して前方に別業が、後方に浄土教寺院がゾーニングされている。上述した3重の都市領域に対して直列的に、「サト」側に別業、「ヤマ」側に浄土教寺院として「ノ」がゾーニングされている。

「凹型」地形の眼目は、山々による圍繞感と奥行き方向への深さである。別業は、適度な圍繞感と眺望が得られる「サト」側に立地することによって、「サト」からのアクセスを担保しつつ、自然の発見や行楽の機能を充実させ、一方、浄土教寺院は、奥行きのもっと深いところに立地することによって、内省的な自己発見を充実させたと考えることができる。以上の概念図を図-6に示す。

②凸型

「凸型」の地形構造の例として、「鳥辺野」を図-7に示す。「鳥辺野」における別業は、泉涌寺、法性寺、法住寺であり、浄土教寺院は六波羅密寺と珍皇寺である。また、御霊社は祇園天神堂（八坂神社）である。

「鳥辺野」の事例においては、平安京から阿弥陀ヶ峰に抜ける東海道を境に、北部に浄土教寺院が、南部に別業がゾーニングされている。「凹型」で行ったのと同様に都市領域的に考察すると、「凸型」では3重の都市領域に対して並列的にゾーニングされ、浄土教寺院は「ノ」がはじまる「サト」側の地形的な変曲点に、別業は「ヤマ」側に配置されている。なお同様に「凸型」である「船岡・蓮台野」においては浄土教寺院である蓮台寺、引接寺は街道沿いに配置され、地形的な変曲点と同時に「ノ」への入口としての機能も担っていると考えられる。

「凸型」地形の眼目は、「ノ」自体が持つ誘目性や地形的なまとまりである。別業と浄土教寺院の配置関係が、「凹型」

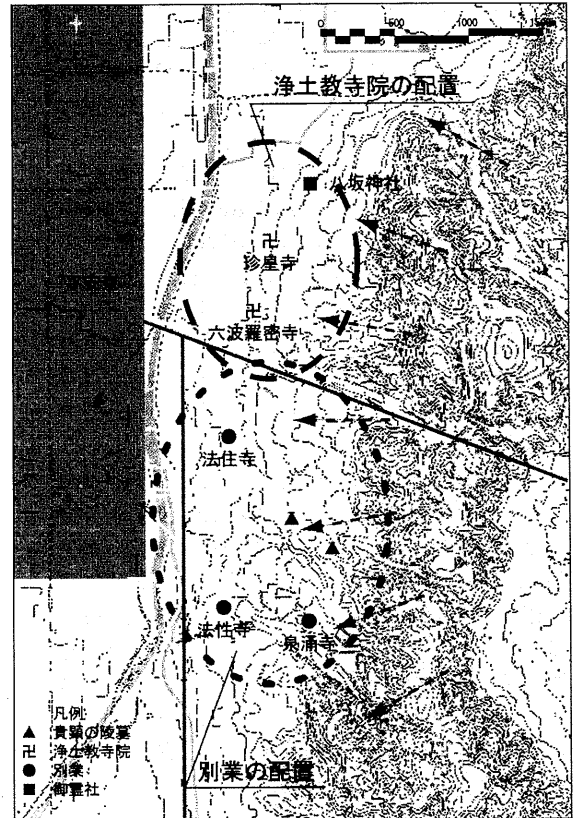


図-7 「凸型」葬地における諸施設の立地（鳥辺野）

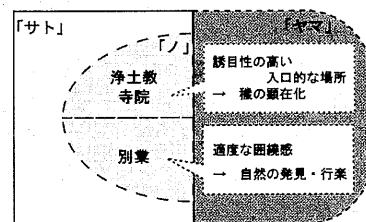


図-8 「凸型」概念図

と「凸型」で逆転しているのは、相反する地形構造を有しているからではないかと考えられる。つまり、別業

はある程度の居住性が求められるため、「凹型」と同様に、適度な圍繞感のある場所が選定され、「凸型」では奥側に配置されている。一方、浄土教寺院は、逆に「凸型」の「ノ」の地形を活かした誘目性の高い入口的な場所に立地し、人々に反省を促すような穢の顕在化の機能を担っていたと考えられる。概念図を図-8に示す。

①・②の分析をまとめると以下ようになる。別業は地形構造の相違に関わらず、居住性を重視した適度な圍繞感のある地に配置されていた。その様な場所を得ることによって、身体的にも精神的にも安全に、都市生活によって失われた自然を再発見することが可能になり、サロンのな貴族のコミュ

ニティを創出することが出来たのではないかと考えられる。しかし、別業の背景(凹型)や別業に至る経路(凸型)には、浄土教寺院に代表される穢の空間が存在していたため、単なる行楽とは趣の異なる陰影の深い体験を提供していたのではないかと考えられる。

一方、浄土教寺院の配置は、「ノ」の形状に大きく依存し、葬地が立地する「ノ」の特徴をもっともよく表現しているものと考えることができる。つまり、囲まれている空間である「凹型」ではその奥まったところに、突き出しているような空間である「凸型」では、その突出部に浄土教寺院が存在するということである。浄土教寺院は穢の場として「ノ」の地形的特徴を有徴化する事により、浄土教の教えにかたちを与え、都市的個人としての自己発見性を充実させていったと考えることができる。

最後に御霊社であるが、この施設の配置は、「ノ」の地形要素に大きく依存している。例として示した「双ヶ岡・宇多野」は「岡アリ」、「鳥辺野」は「岡ナシ」である。「岡アリ」では、岡の麓に御霊社が立地し、「岡ナシ」では野の端部と山麓が接するあたりに立地している(図-5、図-7参照)。これは、「ノ」という微妙な地形変化の中に親しみやすい小さなランドマークと認識されるような場所を庶民の祭礼の場に最適な場所として選択する事によって、庶民レベルでの新しい都市共同体を創出する機能を充実させたのではないかと考えられる。

7. おわりに

本稿では平安京の葬地の地形構造及び都市的機能について以下のことを明らかにした。

- ① 葬地の成立する歴史的経緯を領域論的に考察する事で、平安京の都市空間に対して「ノーストーヤマ」という三重構成を提案し、葬地が立地した「ノ」という中間的な領域を「サト」や「ヤマ」を支える領域として位置づけることができた。
- ② 平安京に関する11の葬地の地形構造について、一般的な特徴として人間が認識できる最低限の勾配を有した拡がりのある地形であることを明らかにした。さらに、要素と形状の二つの視点から詳細に分析することにより、以下の様に分類する事が出来た。要素の視点からは、岡の存在に着目して、岡を有するものを「岡アリ」、有しないものを「岡ナシ」の2種類に、また、形状では、山が野を囲むようにあるものを「凹型」、野が一つのまともりとして突出しているものを「凸型」の2種類に分類し、計4種類の葬地を抽出することができた。
- ③ 「ノ」の地形構造と諸施設の都市的機能がいかなる関係にあったのかについて、諸施設の配置を詳細に検討することで明らかにした。別業は「ノ」の地形構造の相違に

関わらず、居住性を重視した適度な困繞感のある地に配置されていた。浄土教寺院は、「ノ」の形状(凹型/凸型)に依存し、「ノ」の特徴をもっともよく表現している場所に配置されていた。御霊社は、「ノ」の構成要素(岡アリ/岡ナシ)に依存し、「ノ」の微妙な地形変化における小さなランドマーク的な場所が選択されていた。またそれらの配置が、諸施設が有した都市的機能(別業:自然の発見・サロンのコミュニティ、浄土教寺院:穢としての自己確認、御霊社:庶民レベルでの新しい都市的共同体の創出)と相関性が有ることを明らかにした。

(注)

- (1) 本研究で分析対象とした葬地は、既往関連研究が示す一般的なものである。その限りにおいて分析結果には一般性があると考えられるが、より詳細な葬地の範囲の確定や葬地の発見などに関する新たな考古学的知見に応じ、結論を補正していく必要はあると考えている。
- (2) 別業はすべての地域に確認できたが、浄土教寺院は「深草野」、御霊社は「化野・嵯峨野」において確認することができなかった。なお、ここで言う別業とは、貴族、皇族によって創建された寺院を指し、当時はそれらの人々にとって住宅・別荘と寺院との区別が曖昧であったことが建築様式などの点から論じられている²⁰⁾ため、同グループのものとして扱った。

【参考文献】

- 1) 高橋康夫(1988)、「洛中洛外 環境文化の中世史」、平凡社、pp.7-20
- 2) 山本幸司(1992)、「穢と大蔵」、平凡社
- 3) 石母田正(1957)、「中世的世界の形成」、東京大学出版会
- 4) 宇於崎勝也・浅香勝輔(1996)、「都市における火葬場の整備に関する研究—政令指定都市の現状分析を通して—」、第31回日本都市計画学会学術研究論文集、pp.733-738
- 5) 村田尚生・渡辺貴介(1992)、「異界の要素からみた江戸のまちの空間的構造に関する研究」、第27回日本都市計画学会学術研究論文集、pp.25-30
- 6) 高橋康夫(1983)、「平安京とその北郊について」、日本建築学会論文報告集、第315号、pp.163-170
- 7) 京都市編(1970)、「京都の歴史1 平安の新京」、学芸書林
- 8) 京都市編、「史料京都の歴史」、平凡社
- 9) 平凡社編、「京都市の地名」、平凡社
- 10) 森浩一(1970)、「古墳時代以降の埋葬地と葬地—古墳終末への過渡的試論として—」、古代史学研究57、pp.19-32
- 11) 五十川伸夫(1980)、「平安京・中世京都の葬地と墓制」、京都大学構内遺跡調査年報 昭和55年度、pp.53-66
- 12) 上野竹次郎編(1925)、「山陵」、山陵崇敬會
- 13) 田中久夫(1975)、「文献にあらわれた墓地—平安時代の京都を中心として—」、森浩一、社会思想社所収
- 14) 奥村郁三、「大化薄葬令について」、文献8)所収、pp.81-114
- 15) 和田萃(1976)、「東アジアの古代都城と葬地—喪葬令皇都条に関連して—」、大阪歴史学会編『古代国家の形成と展開』吉川弘文館所収
- 16) 前掲10)、11)
- 17) 福田アジオ(1982)、「村落領域論」、福田アジオ『日本村落の民族的構造』弘文堂所収
- 18) 伊東久之(1985)、「ノラの語義変遷をめぐって—一村の領域認識における中世と近世—」、岐阜大学教育学部研究報告、人文科学、第33巻、pp.1-10
- 19) 大野晋[ほか]編(1990)、「岩波古語辞典」、岩波書店
- 20) 柳田国男、「地名の研究」、ちくま文庫、p.64
- 21) 日本建築学会編(1983)、「建築設計資料集成10技術、九巻」、pp.208-222
- 22) 前掲8)
- 23) 高橋康夫(1990)、「都市と名所の形成」、季刊自然と文化1990新春号 観光資源保護財団、p.6
- 24) 網野善彦(1994)、「無縁・公界・楽—日本中世の自由と平和」、平凡社、p.154
- 25) 前掲3)
- 26) 前掲3)
- 27) 井上満郎(1984)、「御霊信仰の成立と展開(民衆宗教史書第5巻 御霊信仰)」、雄山閣出版、pp.119
- 28) 前掲7)